

保守員としての目覚め

NECフィールドディング株式会社
北海道・東北ブロック統括部
青森支店 八戸営業所

山 口 泰 正

普段何気なく動いている装置も、止まれば多くの人の仕事や生活に影響が出てしまいます。その裏側で装置を支え、安定稼働させているのが保守であり、現在の自分はその役割を担っています。しかし、配属当初は「保守員」という言葉の重さを正直よく理解できていませんでした。

私は入社三年目になりますが、最初の頃は専門用語や装置の構造も分からず、与えられた作業をこなすだけで精一杯でした。現場に出るたびに緊張し、トラブルが発生すると焦ってしまい、何を優先すべきか判断もできず、先輩の指示を待つしかなかった事をよく覚えています。まだこの時点では、保守という仕事に対して明確なイメージを持てていませんでした。

特に印象に残っているのが、プリンタの障害対応です。一度復旧したと思っても、しばらくすると同じ症状が再発し、何度も再対応することになりました。原因が特定できないまま対応を繰り返す中で、「利用者に迷惑をかけてしまっている」という焦りと、直せない自分の力不足を痛感していました。その時、同行していた先輩から

「今は遠回りに見えても、原因を一つずつ潰すことが一番の近道だ。

一度直すのは技術だが、二度起こさせない

のが保守だ」という言葉をかけられました。

「とりあえず動くようにすること」という結果ばかりを優先していた自分にとって、この言葉は大きな気づきとなりました。

その後は、ログや部品の状態、設置環境まで一つずつ丁寧に確認するようになりました。時間はかかりましたが、最終的には根本原因を特定でき、再発防止につなげることができたことは大きな自信となりました。

この経験を通して、ただ表面的に直すのではなく、原因をしっかりと見極めて対処することで、安定稼働させることこそが、保守に求められる役割なのだと学びました。

保守の仕事は常に想定外と隣り合わせであり、マニュアル通りにいかないことも多く、原因がすぐに分からないトラブルに直面することも少なくありません。同じ確認作業を繰り返したり、自分のミスで作業に時間がかかってしまったこともあり、そのたびに力不足を痛感していましたが、先輩の言葉がきっかけとなり、少しずつ仕事への向き合い方が変わっていきました。ただ装置を直すのではなく、「なぜこのトラブルが起きたのか」「再発させないためにはどうすればよいのか」を考えるようになり、先輩の作業を見て学ぶだけでなく、記録や過去の事例を確認し、自分なりに考える時間を持つようになったこと

は、大きな成長につながったと感じています。

少しずつではありますが、保守員としての自覚が芽生えてきたと実感しています。

三年目になった現在も、まだ全てを一人で判断できるわけではありませんが、状況を見て行動できる場面は確実に増えてきました。エラー表示が消え、装置が何事もなかったかのように動き出した瞬間には、言葉では表しにくい達成感があります。

また、お客様から「これが使えないとお客さんに納品できなくて困っていたんだよ。ありがとう」という感謝の言葉をいただいたとき、保守の仕事が人々の当たり前の日常を支えているのだと強く実感しました。

保守員の仕事は目立つものではなく、「直

して当たり前」と思われやすく、評価されにくい仕事かもしれません。しかし、もし自分たちがいなければ設備は止まり、日常は簡単に崩れてしまいます。その責任の重さと重要性を理解できたことが、この三年間で得た最も大きな学びです。

これまでの失敗は決して無駄ではなかったと思いますし、これからもきっと失敗することはあると思います。しかし、その一つ一つの経験を糧にして、知識と技術をさらに身につけ、安心して任せてもらえる保守員を目指して成長していきたいと考えています。

これが、三年目を迎えた私の「保守員としての目覚め」です。